

平成 20 年度 賀茂県主同族会祖先祭記念講演 講演録

## 上賀茂 和歌と花の道を歩く

松本章男先生

平成 20 年 10 月 26 日 上賀茂神社庁屋

松本章男でございます。どうぞ宜敷くお願いします。先ず最初に一言御礼を申し上げます。この度は藤木文雄様から御招請を頂きまして、最初にこのような厳粛な式典にまで相席させて頂いて、大変心の清められる澄み渡る思いを致しました。有難うございました。

さて、『上賀茂 和歌と花の道を歩く』は、これも藤木様から頂きました講題でございますが、只今御紹介頂きましたように、平素、京都の民俗美学というものを心がけておりますものですから、わりあい、京都周辺を実地にフィールドワークを致しております。そういう事で、上賀茂へもよく寄せて頂いているのですが、昭和 6 年の生まれで、77 歳にもなりますと、かなり物忘れがひどくなりまして、最近、備忘帳みたいなものを作って、今日はどこへ行ったとかいう事を僅かに書き留める事をしてしておりますが、この上の社へもついでの間寄せて頂いたなあと思いながら、その備忘帳をくって見ますと、もう二年も経っているのです。平成 18 年の 3 月と 5 月に寄せて頂いています。その時の事から聞いて頂こうかと思えます。

3 月 29 日には、東京の友人と参りました。桜はまだ咲いていないのではなかろうか、ちょっと早いけれど、上賀茂神社の御所桜と、あの平野神社の「さきがけ」という桜があります。この二本が京都では一番先に咲くものですから、新聞なんかで紹介されているものです。私はきつとこの二本の桜が兄弟ではないかと思ひまして、先ず上賀茂神社へ行って見ようかと参りましたら、ちょうど満開でした。その時に終野の奥村さんの「五色散り椿」も友人が見たいと言いますので、まずその椿のまゝに神山の景観を遠望するため西賀茂を歩こうかと言うことで、上賀茂神社から「さきがけ」を見た後、最初に神光院に寄ってみました。ここは賀茂能久さんが中興なさった真言宗のお寺です。それから五山の送り火の一つ、船山の麓の正伝寺、これは臨濟宗南禅寺派のお寺ですけれど、そこから西賀茂をずっと山の麓を北の方に上りまして、靈源寺へちょっと立ち寄り、そこから志久呂橋を渡りました。御園橋より二つか三つ北の橋です。志久呂橋と書いてありましたが、「志」を久しく漕ぐ、この呂は舟を漕ぐ艫が相応しいのではないかと以前から思っていました。志を久

しくして鱧を漕ぐ、つまり、賀茂建角身命<sup>かまたけつのみこと</sup>がお嬢さんと一族を連れて、南山城の賀茂から木津川を遡って、そして、瀬見の小川の方が、桂川からの水は濁っているけれども、こちら側の川の水は澄んで美しく、浅い瀬が続いている。こちらの方を上ろうと上ってきて行き着いた所がちょうど志久呂橋あたりであるとすれば、まさしく神山の麓です。そういうロマンを描いてみると、ちょうどこの辺まで上がって来たのではないかと思います。

そのようなことを考えながら、友人と話し合ったりして、そして奥村英継邸の椿を見せて頂いたのです。賀茂の社家、それぞれの社家には、藤木さんからのお話では、ほとんどに、「やぶつばき」が一番姿がうるわしいと思いますが、それらの古木が沢山あるそうですが、奥村邸の「五色散りつばき」と云うのは、椿の花はポツと落ちますけど、これは花卉が散って落ちます。そして、五つの色に咲き分けています。これはひょっとすると秀吉が朝鮮征伐の時に持ち帰ったのが最初ではないかと云われたりしている椿です。奥村家のは非常に根元の太い名木で、このごろ「五色散り椿」は人気がありまして各地で見られますが、この奥村家の椿は明らかに一番古い、日本の五色散り椿では一番の先祖に当たるだろうと云う散り椿です。

それを見たのが3月29日、それから5月11日と5月18日、平成18年、これはちょうど二週にわたりまして、木曜日ですが大田神社の東側の愛染倉<sup>あいせんくら</sup>でちょっとした二回連続の会がありまして、それに寄せて頂いた時に、当然の事ですがこの上の社にもお詣りさせて頂きました。11日はちょうど「多羅葉」の花が満開でして、権殿<sup>ごんどの</sup>の外南側に見事な「多羅葉」がございます。これが黄色い小花が満開でして、「多羅葉」の花を見るのは久しぶりでございました。その時に、比較というとは何ですが、ふっと思い出したのは、比叡山の東麓、坂本の日吉神社の祭神は七神で七つ社がありますが、東本宮<sup>ひがしほんぐう</sup>の方には、東本宮と並んで樹下宮と云う、七つの社の一つがあり、その樹下宮<sup>じげぐう</sup>の祭神は実は賀茂玉依姫<sup>かむなまよりひめ</sup>でして、その東本宮には大山咋神<sup>おおよまけのかみ</sup>をお祀りしてあります。ちょうど一段降りたところに樹下宮がある。ちょうどその境目のところに見事な「多羅葉」の木がありまして、これはきっと上賀茂神社の「多羅葉」と兄弟の「多羅葉」の木ではないかと以前からそう思っているのですが、その「多羅葉」も見事です。「多羅葉」と云うのは「もち」の木料ですが、かなりな大木にはなりますけど、幹があまり太くはならない、育ちが遅い木です。こちら上賀茂の「多羅葉」も大変見事な「多羅葉」でございます。

で、その時に大田神社の「かきつばた」も拝見しました。私は子供の時から、「かきつばた」はよく見てきましたが、ちょうど路頭の儀の5月15日ぐらいが京都の「かきつばた」

の満開なのですね。それが例年の温暖化で花どきがやや早まってきていますが、この平成18年は5月11日で、まだちょっと満開前と云うことで、非常にいきおいのある紫色のきれいな見頃でございました。5月18日にはまたこちらへ寄せて頂いて、「ヒトツバタゴ」

(なんじゃもんじゃの木)、ついそこの所にありますが、これが白い円錐花序と云いますか、こまかい花を咲かせますが、これが木綿<sup>しん</sup>四<sup>し</sup>手に例えられる卯の花、すなわちウツギに負けず劣らずというほど清く白い満開でございました。今ちょうど、ここへ寄せて頂く前にお詣りをして、「ヒトツバタゴ」の前に行ってみますと、葉がちょうど黄葉、真っ黄色です。ちょっと境内を見渡したところ、一番黄色い色づきを美しくしているのが「ヒトツバタゴ」でございました。大麥清らかだなあと見せて頂きました。それから、こちら(庁屋)へ寄せて頂きました。それでは、特に和歌についての<sup>かみ</sup>上の社とのかかわりを中心にお話をさせて頂こうと思います。

最初に、和歌だけでなく日本の伝統文化を考え、鑑賞する上では暦の事情と云うものをおろそかにできません。と云うのは、持統天皇の時代から1200年間、ちょうど明治6年に現行の<sup>たいよう</sup>太陽暦<sup>れき</sup>に変わるまで、<sup>たいいん</sup>太陰<sup>たいよう</sup>太陽暦<sup>れき</sup>が中国から入ってきた暦をもとに作られて、使われておりました。その暦と現行の暦との間には大体平均すると40日ほどの偏差があります。旧暦は月の朔<sup>しつ</sup>から朔<sup>しつ</sup>までの29.5日で一ヶ月を作っていましたから、三年に一度は<sup>うづう</sup>閏年<sup>ねん</sup>を設けなくてはならなかったと云うわけで、<sup>はんぷく</sup>振幅<sup>あま</sup>がありますけれど、平均しますと40日ほどの<sup>へんさ</sup>偏差<sup>さ</sup>があるわけです。昔の、例えば正月元旦は今の暦でどう云う日だったかと云うと、40日ずらすと、計算してみても、一ヶ月ずらして十日足せばよいわけです。今の2月11日くらいが大体、正月元旦であることが多かったと云うことになります。賀茂の祭は、特に路頭の儀は、昔は4月の<sup>とり</sup>酉<sup>とり</sup>の日でした。大体十二支ですから二回きますけど、年によっては三回来ることもあります。三回来たときには中の酉<sup>とり</sup>の日が<sup>ろとう</sup>路頭<sup>の</sup>儀の日である。そうすると、それを一月ずらして十日足すと現行暦の5月に入って、ちょうど5月10日から15、16日までの間が一番それに当たっているわけで、ちょうど昔の仕来り通りに今の賀茂祭が行われているという事がわかるわけです。

そこで、歌の方ですが、最初の<sup>もろ</sup>曾祢<sup>よしただ</sup>好忠、これは<sup>ごじゅういしゅう</sup>後拾遺集<sup>の</sup>歌人<sup>の</sup>ですから平安中期ちょっと前くらいの歌ですが、よくご存じの方もいらっしゃると思いますけれども、

さかきとる卯月になりぬ<sup>かみやま</sup>神山<sup>の</sup> ならの葉かしは元つ葉もあらし 曾祢好忠  
こういう歌があります。これは有名な歌です。うつき、卯の花月、旧暦の四月、ちょうど旧暦の四月の中頃に、この上賀茂一円が卯の花が満開になったと思います。そこをどこで

私が測って来たかと言いますと、「卯の花の匂う垣根にほととぎすはやも来鳴きて」小学校唱歌で習ったものですが、その子供の頃には、卯の花垣と云うのを、昭和の戦前、京都ではわりあいに見ることができたものです。ここから近い府立植物園へ入ると、昔の上賀茂神社の外苑というか、森の一部であった<sup>なからぎ</sup>半木の森と云うのが植物園の中に残っております。その東側に植物生態園と云うのが大正 6 年から作られて「日本の森」と名付けられていますが、そのちょうど東南の角の所に、ウツギ、本うづきの昔から卯の花と云っていた木の相当な古木があります。これは低木ですから大きくはなりません、そのまま放っておくと花が咲かなくなるので、数年に一遍は根元のところから、株元から枝を払ってしまいます。そんなんですからそう大きくはならないのです。ここの花を見ていると、ずっと私は毎年観察していきまして、だんだん早くなってきていますが、大体 5 月 25 日を目安に植物園に行きますと、その卯の花が満開なのです。

と云うことは、そういう所でちょっと自信を持ったわけですが、ちょうど卯の花月、旧暦四月、4 月 15 日から 40 日ずらしたら 5 月 25 日になります。だから京都の卯の花が四月の中頃になるとちょうど満開になるので、<sup>ふぶい</sup>弥生の次には卯月、卯の花月という風に云ったのではないかと思います。さて、その卯月の<sup>かき</sup>榊をとる。榊は<sup>よりしろ</sup>依り代としても使われるわけですから、その「榊とる卯月になりぬ神山のならの葉かしは元つ葉もあらじ」。曾祢好忠と云う人は京都駅の西の方の吉祥院、あの辺で平素は暮らしていたような感じがするのです。この方の歌を見てみますと、好忠が朝起きて顔を洗ってあの辺から見ますと、神山が見えるのです。京都駅近辺まで烏丸通りを下がって、ちょっと西の方から見ると、今は障害物がありますけど、高みに立つと神山がくっきりとお<sup>むか</sup>椀型に神々しく見えるわけです。卯月になりますと、これは祭月ですから、「さかき」を取る。その「榊」が取られる神山ではならの葉かしが、卯月になったから元つ葉（古い葉）もなくなっているだろうなあ、とこう詠んでいるのではなからうか。そこで私の説をここで入れるのですが、「ならの葉かし」と云うのは、いろいろ説があって、どういう木を云っているのだろうかは学者によって書いていらっしゃるのが違います。これを落葉樹だと思っていられっしゃる方も多いのですが、私は実は今云う「あらかし」ではないかと思っています。ぶな科の木で「こなら」なら落葉するのが多いのですけれど、常緑のぶな科の木をほとんど「かし」と呼んでいます。関東の方へ行くと「しらかし」が多いですし、京都では「あらかし」が多い。これは今も障壁を兼ねて庭木などに垣根のように、垣根でも低いのではなくて、高い垣根にしたりにするの「あらかし」が植わっていますが、これを平安時代には「なら葉かし」と呼ん

でいます。私はその「かし」ではないかと思っています。

これも理由があって、小学校の時、私は錦林小学校で、平安神宮の真裏の小学校を出ています。ここは湯川先生とか朝永先生とかノーベル賞を頂かれた方が出られた小学校なのですが、私が小学生の時、4月29日が天長節でした。休日ですけど学校へ行きまして紅白の饅頭を貰って帰るのです。帰りには丸太町通り、平安神宮の裏の所で、ちょっと風がありますと、枯れ葉が舞うのです。それが「あらかし」の葉なのです。新葉が出てきていますので、常緑樹なのに古い葉を落とすわけです。それを小学生の時に気付かしまして、それから同じ所に住んでいるものですから、ずっと観察していますと、今も4月29日から飛び石連休に入ります。ちょうど飛び石連休が5月5日で終わるころにかけて、この「あらかし」の葉が舞います。それで丸太町通りに面した平安神宮の裏の築地の外の溝が葉で埋まってしまうほどになる。ちょうどその「なら葉かし」の元つ葉がまさしく散ってしまってなくなる、元つ葉をみな落とす頃に旧暦の卯月に入る、そう言う意味でこう詠んでいるのではないか。ああ神山が見えるけれども、あの<sup>ふたばあけ</sup>双葉葵が摘まれているあの神山には「なら葉かし」も多いけれども、ちょうど風に元つ葉を散らしきってしまったのではなからうか。そう云う風に遠くこの賀茂の御神体の山を見ているのではなからうか。そんな風にこの歌を思うわけでございます。

それから、五月に入ると「かきつばた」が咲き出します。大田の沢の「かきつばた」、よくご存じだと思いますが、平安時代はまだ沼沢として、今の池よりも大きく残っていたのだろうと考えられます。ここに挙げましたように、江戸時代になりますと池と呼ばれているから、今の形に変わって来ていた。小さくなって来たと考えられます。ところがこの大田神社の「かきつばた」は平安時代からの原種をそのまま留めて、残してきていると云われています。植物の方はバイオが加わって来ていますから、花が変化がいちじるしいものの、この大田神社の「かきつばた」は紫の色が濃くて、何となく葉もほっそりとしていますし、例えば<sup>れがなこうりん</sup>尾形光琳が描いた「かきつばた」なども偲べるような昔の「かきつばた」の性質を留めているのではないかと思えます。<sup>ふじわらしんげい</sup>藤原俊成が有名な五社百首（<sup>ぶんじ</sup>文治6年、1190年）に一首詠んでいます。

<sup>かきつばた</sup>神山や大田の沢のかきつばた 深き頼みぞ色にみゆらむ

この「神山や」は枕ことばとしても、この上賀茂神社の摂社である大田神社の沢にかけていると云えるでしょう。大田の沢の「かきつばた」は深き頼み、頼みと云うのは期待と云う意味ではなく、神への帰依、神への信仰心と云う意味で、頼みと云う言葉を平安時代は

使っております。大田の沢の「かきつばた」は賀茂の神への深い帰依心信仰心があるから、このように紫の清い色に咲いているのだなあ、と云う意味でこの歌は詠まれているのだと思います。その頃の大田神社の前はもっとずっと沼沢がひろがっていて、「かきつばた」が咲き、「まこも」が繁りと云った様子だったのだと思います。

江戸時代になると<sup>せいげんじょうこう</sup>霊元上皇、この<sup>ごみずのおてんのう</sup>霊元院、この方は後水尾天皇のお子さんの一人で、第百十二代の天皇であります。退位されてから、これは和歌に造詣が深くて、いろいろな歌学の本も書いていらっしゃる方で、この歌もなかなかむつかしい歌ですが、すばらしい歌ではないかと思います。

花もさらに大田の池のかきつばた へだてぬかげや数をそふらん  
こう詠んでいらっしゃる。「へだてぬ」と「かげ」はこれが複雑な意味に、一つの単純な意味ではなしに、二つの意味を掛け合わせて使われています。「へだてぬ」はへだてない、つまり、わけへだてがない、差別がないと云う一つの意味です。それと、もう一つは俊成が詠んだ頃から時間の距たりを感じさせない、昔と変わりがないと云う意味でも「へだてぬ」と云う言葉を使います。その両方の意味で使われている。「かげ」と云うのも「かげ」は光ですし、姿です。それが一つの意味です。もう一つは神から頂く恵み、神の庇護、それも「かげ」です。この二つが掛け合わせてある。大田の池の「かきつばた」は紫の色が普通りで変わらないのは勿論のこと、花の姿も数も増やしているから、そこには一層わけへだてのない神の恵みが増し加わっているのではないであろうかと、そんな風の意味で、この歌が詠まれていると思います。

その「かきつばた」ですが、この「かき」と云うのは距てるとの意味があり、「かきつばた」と云うのはちょうど旧暦の三月と四月の境目に咲いた。それで、例えば勅撰集で後撰集では夏歌の部に入っておりますし、それから少し遅れて堀河百首ではこの「かきつばた」が題詠されまして、「かきつばた」と云う題で歌人が詠んでいるのですが、今のいわゆる和歌や俳句の季語と云うのはこの堀河百首から定着して始まっています。そこでは春歌になっています。春の最後に詠まれた、つまり、春の最後の頃に五分咲きになって、そして満開の花を楽しもうとすると夏歌になって、そう云うところで「かきつばた」が詠まれているわけです。ちょうど春の最後と云えば旧暦では3月30日、40日ずらすと5月10日過ぎと云うことになります。5月10日過ぎだったらまだ五分咲き、六分咲き、5月15日でちょうど現行暦の5月15日ごろに満開になる。それが今もびっちり合っているわけです。桜なんかはかなり早くなって来ていますが、「かきつばた」は割合に普通にまだ咲いてくれて

いるなと云う感じがします。

そう云うところから、賀茂の祭が近付いて来る卯月、四月全体が昔は賀茂祭の月と云う感覚であったろうと思いますが、その中で酉の日が近付いて、清め草の葵を摘んで、御阿礼（みあれ）にかざす。

神山の苑の葵をくさりつつ 今日けふの御阿礼みあれにかざしつるかな 藤原仲実ふじわら ちかみ

これが先程申しました堀河百首で「葵」の題で詠まれている歌です。この仲実は、例えば奉幣使ほうへいしの勅使として上賀茂神社へ路頭ろとうの儀に加わったこともあるだろうと思いますが、この日には、路頭の儀の日には内裏ないりでも大内裏だいだいりでも祭壇が設けられて、そこで路頭の儀に加わらない公家くわ、諸大夫、いわゆる高官の方たちは内裏で賀茂の社にお詣りをしたわけです。その時、やはり葵桂をかざしてお詣りしたわけで、「くさりつつ」と云うのは鎖くさりのようにつなげる、神山の葵の葉をどう云う風にしたのでしょうか、衣裳の上に例えばネックレスのようにしたのかも知れません。「くさりつつ」お詣りしたと云う風に詠んでいます。

さて、その次の式子内親王しきこ ないしんおうの歌ですが、これはあまりにも有名でして、新古今集にも採られています、

忘れめや葵を草に引き結び かりねの野べの露のあけぼの 式子内親王

これは御阿礼みあれの日に神山から御神体をお迎えするのに、きっとこの時代は向こうの神山の麓の野の中に仮屋かりやを設けて（霊屋を設けて）、そこで式子内親王は賀茂の齋院さいいんであったので、齋院と云うとこれは言葉が悪いのですが、これは人身御供ひとみごなのです。唐突に人身御供と云いましたが、平安遷都の時に賀茂一族の人たちが平安京に来たすべての官吏たちの食生活まで賄もつってくれる大いなる奉仕をしてくれたから、この一族の祖を崇あがめようと云うわけで、宮中では奉幣使を送るようになり、同時に伊勢に齋宮を出すのと同じように、伊勢に次いで賀茂に皇室が内親王を送り込む。それは実は内親王が御神体と結婚して、毎日御神体のお世話をするために、結婚するために送ったのが齋院ですから、式子内親王は御阿礼みあれの日に神迎えをするのに、神山の麓に御阿礼みあれの場と云うのがあったのだそうですが、そこで仮寝かりね、つまり野宿するわけで草枕をする、当時は野宿をする時に草を束ねたのを枕にする。そこにやはり葵の草を引き結んで、一夜を明かす訳です。仮寝と云っても、寝ると言っても眠るわけではなく、神様をお迎えする儀式で一夜が明けるのでしょうか。それを夜を徹して式子内親王がはじめて体感したのが十九歳ではなかったかと思いますが、それからずっと一生の間感激を繰り返して、賀茂の祭になると後も思い出している、そう云う感慨で詠まれているのではなかろうかと思います。

もろかずらかけてや訪ふと待ちわびぬ はかなき草の名を待みつ 後鳥羽院  
後鳥羽院の歌です。「もろかずら」と云うのは、これは字引を引きますと双葉葵の異名で出てきます。「もろ」と云うのは二人連れと云う意味と同時に、沢山、いろいろ、諸々、すべてと云う意味との両方があります。この祭の時はもろ人、宮中からの勅使も、賀茂の神官も氏人も、一般の参拝客も、皆が葵をかざした。そう云うところから「もろかずら」、双葉葵を二つであるから「もろ」と同時に、皆さんが葵を清め草として身体につけたから、「もろかずら」。「もろかずらかけてや訪ふと」、後鳥羽院は承久の変の後、隠岐の島に流されました。隠岐ですと晩年に亡くなるわけですが、亡くなる前年に周辺の人々が後鳥羽院をお慰めするために、後鳥羽院の血をひいている人、あるいは身寄りの人を京都から招くようなことはできないかと運動をするわけです。その時に後鳥羽院の中宮として長く愛を受けた人は修明門院重子（シゲコ）と云いますが、このような女院号を受けているような三后と呼ばれる人たちは当時の律令の掟によって、流された人の所へは送ってはいけない、公家の人も行くことはできない。他の子供、親王たちも行くことができない。

ところが後鳥羽院には当時の賀茂能久のお嬢さんとの間にもうけた氏久と云うお子さんがありました。その人、氏久さんを隠岐へ呼ぼうではないかと云う運動があつて、それが実現するか、実現するかと後鳥羽院は待ちわびるわけです。それが「もろかずらかけてや訪ふと待ちわびぬ」、しかし遂にきてくれなかった、それは行けなかったわけです。「はかなき草の名を待みつ」、これは亡くなる前年ぐらいに詠んだ歌です。「はかなき草」と云うのは葵草のことです。

当時の恋歌で葵草と云うのは「あうひ」逢う日にかけるわけで、語呂が似ているでしょう。逢う日にかける、そして、それが逢うことを期待するのだけれども実現しなかったと云う恋歌の場合に、葵草と云う語を歌の上では使われ、詠まれているのです。例えば、法然上人にこんな歌があります。

われはただ佛にいつかあふひぐさ 心のつまにかけぬ日ぞなき  
実は法然上人と式子内親王が恋仲でございました。これはプラトニックラブです。式子内親王は齋院を退官しても、一度神と結婚した身ですですから、退官した齋宮や齋院は一生独身で過ごさなければならなかった。これは内親王ですから周囲からやかましいから、恋をしても、その恋は秘めて過ごさねばならない、隠さなければならなかった。法然は八条院のところへ講演によく行きまして、その時に式子と知り合うわけですが、二人は恋を一生隠して、次の世で一緒に逢おうねと約束するわけです。式子の方は先に亡くなります。

亡くなった後に法然上人が「われはただ佛にいつかあふひぐさ」、これは「会ふ比丘さ」「葵草」と二つ掛けているわけです。「あうびく」、比丘、男の僧侶のことを「びく」と云います。われはただいつか佛に会おうとしている「びく」である、僧侶である。われはただいつかは式子に逢いたい、いつも葵草をかけて神に仕えていた式子に逢いたい僧侶である。両方かけているわけです。「心のつまにかけぬ日ぞなき」、心の端、心の隅に佛を祈って、浄土阿弥陀仏のことを心の隅においているけれども、また心の妻に式子を思っているのだ、こう云う風に詠んでいる。そんな風に「はかなき草」と云うのは詠まれておった。その、例えば法然の歌なんか後鳥羽院は知っていたのかも知れません。そう云うところから、こう云う歌が詠まれています。あと二つ括弧に入れておいた歌は、これは「もろかずら」がいろいろ詠まれていた恋歌を二つ、後鳥羽院がきつと知っていたに違いない本歌取りをしている歌もあることを添えておきました。

くりかえしわれは恋ふれどもろかずら もろ心なる人のなきかな 相模

この相模と云う女性は恋の浮き名を流したので有名で、百人一首でもご存じの「うらみわびほさぬ袖だにあるものを 恋にくちなん名こそ惜しけれ」と云う歌を詠んだ人です。もう一生を老いるまでくり返して、いろいろな男性と恋をしてきたけれども「もろかずら」、本当に心から私と一緒に、心から一緒になってくれる人はいなかったと云う風に云っているわけです。

この歌の次に

わが恋はふたかみやまのもろかずら もろともにこそ掛けまほしけれ 俊恵

この「ふたかみやま」ですが、二人で葵草を挿して、賀茂の祭に参拝したいと云うことで、ふたりの髪、ふたかみやま、御神体の神山と、もう一つの地図の上でも東の方に神山と今日でも呼ばれている山があります。と云うことは私は葵草はそちらの方の山でも摘まれていましたから、そちらも神山と呼ばれていたのではないかと思います。そんなことでふたかみやまと云うふうに詠んでいるのです。いま御神体と仰がれているのは伏盆型の方で、これはきつと別雷命のもがりもされたのがあそこだろうと思いますし、昔は伏盆型の、例えば大和の三輪山などもそうですけれど、情報を発信するのに格好の山、烟を上げたり銅鐺を叩いたりして、いろいろな通信をするのに麓で働いている人々たちを見渡せて、情報を伝達しやすい形の山が各地で御神体の山になっていますが、賀茂の神山もそういう山だったろうと思います。たぶん、そんなところから本来の神山がやはり伏盆型の神山であったのだろうと思います。此の俊恵さんは「わが恋はふたかみやまのもろかずら」、葵草の

ようにふたつのもろかざら「もろともにこそ」彼女と二人で葵草を挿して賀茂のお祭にお詣りしたいと云っているわけです。

これは失礼ですけど、藤木さんの藤木家の一番のご先祖は藤木重保、賀茂重保さん、後に月詣和歌集を編まれますが、この重保さんと大変親しかったのがこの俊恵、源俊頼のお子さんですが、俊恵さんがそう云うことで重保とも親しかったのですから、賀茂の社にもよくお詣りしていただろうと思います。そして、もう一つ、

神山の露もまだひぬあふひ草 けふ玉だれにかけそへてけり 飛鳥井雅親

これは室町時代の歌でして、享徳2年(1452年)1月13日に詠まれている歌なのですが、これはご承知の銀閣寺を作りました足利義政が歌会を行いまして、その時に十三日に「葵」と云う題を出しまして、こんな歌が詠まれました。と云うことは賀茂祭だけではなくて、お正月でも双葉葵というのは多年草ですから、お正月の頃にも摘めたのではなかろうかと想像するわけです。ちょうど清め草として用いられて、いろいろな行事の時にかけられたのではなかろうかと感じたりしています。当時の正月十三日と云うと、この年は例えば、予の日だったら予の日の行事が行われたりしたかもわかりません。小松引きが行われたかも知りません。唯一つ、この当時に云えることは正月十三日と云うのは吉野の葛族の人たちが京都の宮中へ干し鮎とか葛を奉納して葛の舞と云うのが行われた日です。そう云うことも若干の関連があるかなあと思ったりしながら、この歌を楽しんだりしています。それから「卯の花」へ移りましょう。

神山のふもとの里の卯の花は 木綿四手かくる櫛とぞみる 源家俊

本当にこんな風に見えたのでしょうかね。この賀茂の山ふところ一面に卯の花が咲いている。今は幣は今日拝見しましたように、いわゆる紙になっていますけれど、昔は「こうぞ」を晒した真っ白な繊維だったわけですから、ちょうど卯の花がこまかい花が群れ咲いたように見える、それがちょうど木綿四手の櫛の四手のように見えた風に詠まれています。これは永久4年(1116年)、源家俊。白河院の時代ですが、鳥羽の北面歌合で詠まれた、

神山の麓にさける卯の花は たが標ゆひし垣根なるらん 藤原実行

同じような意味でございます。この藤原実行と云う人は鳥羽天皇の中宮でありました待賢門院さんのお兄さんです。

神まつる卯月になれば卯の花の 垣根も小忌の衣きてけり 藤原経家

これは藤原経家の歌でして、これは治承3年(1179年)の治承三十六人歌合と云う会で詠まれておりまして、六条家と云う歌学の宗家の大変な重鎮だった藤原経家と云う人でござい

ます。この歌に着目したのが、先程云いました藤木重保で、重保さんは1182年、この歌が詠まれてから数年後ですが、月詣和歌集と云う歌集を編んでおられます。これは上賀茂の社へ月詣をされる歌人やお公家さん、諸大夫が多かった、そう云う人たちの歌を中心に編まれている歌集で、そこにこの歌も採られています。小忌衣（おみごろも）と云うのは神官の方々が、このお祭のときに一番上からかけられた白い衣のことだと思えます。これらは卯月、旧暦の祭月の四月の卯月です。

次に4月15日、現在では5月25日ぐらい、卯の花の盛りの頃になるとほととぎすが飛来した。私の住む岡崎でも今は来ませんが戦後も一時数年間ですがほととぎすが来て、声を聞かせてくれたこともあります。それを書き留めていましたら、大体5月25日ぐらいから6月10日頃までの間、数日時々ポッポッ来て、非常に気ままな鳥でしたから、今日来たからと云って明日来るわけではなく、しかし、夜が白む頃と夕方、夕まぐれ暗くなる頃に声が聞けるのです。夏の間は比叡山の奥あたりへ行き、そして秋には南の国へ帰って行く、そのほととぎす。実は日本の和歌の中で、鳥で一番数多く詠まれているのがほととぎすです。うぐいすだろうと思われる方がいるかもしれませんが、うぐいすよりもはるかにほととぎすが沢山詠まれています。それほどほととぎすの声と云うのは一遍明け方に暗いときにこれを聞きますと、もうその声が耳底に残って眠られなくなる。一遍聞いたら眠られない。そう云う歌が詠まれています。ほととぎすがまた明日の朝もう一遍来てくれるかと思うと眠られなくなるから、はっきり、これは明日は来てくれないことがわかっていれば、今晚は熟睡できるのになあと、そう云う意味の歌が詠まれているのです。

ほととぎす声待つほどは片岡の 森のしづくに立ちや濡れまし 紫式部

この紫式部の歌は、先程の神主さまからもお話がありましたが、こう云う詞書で、勅撰集の詞書はちょっと違いますけれども、この紫式部集にはこう云う風に書かれています。

「賀茂に詣でたるに、ほととぎす鳴かなんといふ<sup>あはれの</sup>曙に、片岡の<sup>こぎえ</sup>梢をかしく見えけり」女官の人たちから上賀茂の片岡のほとりへ行くと、ほととぎすの声が聞けますよと云う風に云われて、社頭へ来て宿をとって仮寝をして<sup>あはれの</sup>曙暗いうちに片岡の森のそばに立ったわけです。この歌の優れているのは、古今集の歌に見まがうほどの風体をみせているところです。ほととぎすの声を待つだけでなく、「片岡の森のしづくに立ちや濡れまし」鳴いてくれるかどうか、森の雫に濡れながら、ほととぎすの声を待ちましようとする、さあ、この後にほととぎすが訪れて鳴いてくれたのかどうかわかりません。それが余情となって、この歌を引き立てている。この歌が新古今集に選入されてきたのです。新古今集が成立する

のは元久<sup>げんきゅう</sup>2年(1205年)、これは古今集<sup>こきんしゅう</sup>が成立してちょうど満300年目に当たります。で後鳥羽院はこの時にはまだ後鳥羽上皇で院政をしいていました。これより数年前に和歌所と云うのを作りまして、寄人11人を設けて、そのうちの6人を選者に選んで、この日本の国中の、美しい四季の優れた国だから、四季の移り行きから心を清め養うことによって、うるわしい国を建て直そうではないかと云うことで、殊にそれを標榜<sup>ひょうぼう</sup>して、新古今集<sup>しんこきんしゅう</sup>を作りたい、それで6人の選者たちに良い歌を選びなさいと云うことで、その時にこの紫式部の歌が選入<sup>せんにゅう</sup>されて来たわけです。その歌を、はじめてその時に後鳥羽上皇が知り、即興的に次の歌を詠みました。

片岡のもりの木かげに立ち濡れて 待つともしらぬほととぎすかな 後鳥羽院

紫式部は片岡のそばでほととぎすの聲が本当に聞けたかどうかわからないけれども、今も上賀茂へお詣りして、暗いうちから片岡の傍に立って、ほととぎすの声を待っている人がいるだろう。そうとも知らず気ままなお前、ほととぎすは鳴いたり鳴かなかったりしているだろうなあ。そんな意味になります。これが実は元久2年3月13日、日吉神社<sup>ひこしじまじや</sup>に三十首の歌を奉納しております。その三十首の中に詠まれていますから、成立目前なのです。新古今集が成立するのは、それから十数日遅れた3月27日に竟宴<sup>きょうえん</sup>、成立した披露が行われている。そのちょうど直前に、こんな歌を詠んで日吉三十首、日吉信者でもないのになぜ賀茂へ奉納せずに、なぜ日吉へ行ったかと云うとちょっと問題に思われるかもわかりませんが、実は藤原定家が日吉神社と非常に深い関係がありまして、選者のひとり定家さんがなかなか云うことを聞いてくれない、後鳥羽院はちょっと定家さんのご機嫌をとるような意味もあって、早く新古今を成立させて下さいよと云う意味も兼ねて、三十首の歌を詠んで日吉さんへ奉納した、その中の歌の一首でございます。

それから、この次の歌が私は好きなのです。

あすもこむ木陰すずしき片岡に 咲けるあふちの花散りぬとも 藤原実伊<sup>じつい</sup>

これは後鳥羽院から50年ほど後の歌ですが、「咲けるあふちの花散りぬとも」、現行暦の5月25日頃になりますと、「あふち(おうち)」の花が咲きます。現在の賀茂社では、この西側に着到殿<sup>ちやくとうてん</sup>、今も路頭の儀なんかで勅使の方が衣裳を替えられたりお脱ぎになったりする殿舎が、このちょうど西側の奈良の小川を越した所にあります。あの櫛<sup>くし</sup>のそばに「あふち」の木が一本あります。今も見てまいりましたら、「栴檀<sup>せんたん</sup>」と書いて括弧して「あふち」と書いてあります。「栴檀」と云うのは白檀とか紫檀のことです。紫檀や白檀は「栴檀は双葉より香ばし」と云う栴檀で香木です。平安時代から鎌倉時代にかけてと思いますが、三井寺

(園城寺)で旧暦の四月下旬になると、<sup>梅檀講</sup>と云うのが行われ、香木を焚いて清めてお祈りをする、これが非常に有名になりました。その梅檀講が行われる頃にちょうど「あふち」の花が咲いていた。旧暦の四月下旬「あふち」の木が花をつける時に、紫の小花ですが、花をつける時に梅檀講が行われる。梅檀講に咲く花、梅檀講の頃にちょうど咲く花、「あふち」の花が咲いたから三井寺の梅檀講を思い出す、そう云うところから間違いが起こったんだと思いますが、香木ではない「あふち(おうち)」が「梅檀」と云う名前に変わってしまいました。江戸時代になってからです。

この「あふち」はご承知の方も多いでしょうが、徒然草の41段に出てきます。「五月五日、賀茂の競馬を見はべりしに 車の前に雑人立ち距てて見えざりしかば、むかいなるあふちの木に法師のぼりて、木の股についゐてももの見るあり。とりつきながらいたう眠りて、落ちぬべきときに目を覚ますことたびたびなり」と徒然草にあります。「あふち」の木は股分かれして大きくなります。例えば、高知城など、高知へもしいらっしゃる方は、もしあったとしたら見てください。大手門を入った所に大きな木があります。これは戦利品や、変な話ですが、敵の首なんかぶらさげて見せたりする。平家物語にも出てきますが、京都の獄舎にも、門を入ったところに「あふち」の木が植えられていた。まあちょっと悪い方の話でいけませんが、めでたい方にも「あふち」の木はよく使われる。ちょうど賀茂の神社には片岡の傍に「あふち」の木があったし、昔は「あふち」の木が多かったんだろうと思います。その証拠に植物園に入りますと、半木の森、さきほども云いました、この社頭の続きの森だった半木の森の一番代表的な木は「あふち」の木、「梅檀」の木だった。それが戦後次々と枯れまして、だんだん切られています。ところが、植物園の半木の森から南東に芝生の大きい運動場のような所があり、あの運動場の芝生の南側に三本、まだ「あふち」の木があり、北側にも一本、それは見事な鬱蒼とした「あふち」の木がありまして、これが今も花を咲かせてくれています。是非一度5月下旬くらいにいらして見てください。上賀茂神社の社頭にもこんな見事な「あふち」の木がきっと昔にはあったんだろうと思っていたでしょう。

あすもこむ木陰すずしき片岡に 咲けるあふちの花散りぬとも

これはかくれほととぎすを詠んでいます。式部の歌をふまえ、後鳥羽院の歌をふまえて今日片岡でほととぎすを待ったけれども、来てくれなかった、もう「あふち」の花は散るかも知れないけれど、「あふち」の花が散ってしまっても明日また片岡に来てみよう。今度は花見がてらではなく、ほととぎすの声を聞くために来てみよう。これはそう云う歌です。

夏草のしげみの花とかつ見えて 野中の森に散るあふちかな 正徹

これは正徹が詠んでいます。室町時代、野中の森と云うのは上賀茂あたりの森を詠んでいるかも知りません。「あふち」の花は小粒で花卉は薄紫ですが、群がり咲くのです。それが草原に散っているのを遠くから見ると、昔からの日本のすみれの花が咲いているかと間違えるほど、綺麗に見えることがあります。

江戸時代の歌を二首

神山のやまびこどよむ声すなり 宮びと今や駒くらぶらし 香川景樹

ますらをは駒くらべせり乙女らも 今日のあやめの根をあわせ見む 小沢蘆庵

競馬を詠んでいます。これは葵祭の後で旧暦の5月5日、いわゆる端午の節句に競馬会神事を行なっていました。だから、現在に直すと6月15日くらいになります。この当ても今と同様、競馬と同時に「あやめの根合」と云うのが行われています。ところが、「あやめ」は旧暦の端午なら葉も根も成長していますが、現行暦での5月5日では葉も小さく根もひげの程度です。「あやめ」と云うのは「かきつばた」とか「花しょうぶ」と似ていますが、また違った草で、ウイナーソーセージみたいな肉穂花序が根元に咲く水草です。これは匂いが非常に強く、虫を寄せつけない薬効があります。端午の節句5月5日と云うと、現行暦の6月中旬になるので、この頃から梅雨の長雨が続いて、食中毒は起こり疫病もはびこるわけです。だから、疫病予防型に生活様式を切り替えなければならないその節句、区切りの日が5月5日であった。この日にあやめ湯に入ります。軒端に「あやめ」を挿します。これはなぜそうしたかと云いますと、軒端に「あやめ」を挿しておけば、蚊なんか入って来ません。「あやめ」を薬玉にして吊しておけば、蚊や悪いものを追うことができます。そして、家では疫病にかからないように、一番大事なのは長男の総領息子ですから、総領息子にあやめ湯を、この日から梅雨が明けるまで使わせます。そのために、女の人が端午の節句を控えて、「あやめ」を沼や沢に引きに行くのが女性の役目であった。それで、いわゆる結婚前の乙女らがみな「あやめ」を引きに行きます。生育した「あやめ」を引きますと、根がものすごく長い。ずるずると泥の中から抜けてくる。私は一度、久多の方でこれを試しにやってみました。長いのは5メートルも前方から根が起きてきます。競馬の傍ら、賀茂の氏人の女性たちは根合をした。若い乙女の誰が長い根を引き当てたか、一番長い根を引き当てた人にご褒美が出て、しかもあなたに良い嫁ぎ先の良いお婿さんが当たりますよと云うことになったらしい。そう云うわけで、昔はちゃんと端午の節句に行なっていました。これを現行暦の5月5日に行なっても、根は未だ小指ぐらいの長さで、意味をなさ

ないと思うのです。明治に太陽暦になって、これは神社そのものに対して礼を失するかも知れませんが、葵祭と競馬会神事の順序を逆にしていたのは、やっぱり、おかしい。葵祭の方は旧暦に準じてやっているのだから、競馬会神事のほうもせめて月遅れの休日にもするべきではないでしょうか。昔は葵祭の路頭の儀をした後で、男の人は田植えをした。田植えがちょうど終わった頃にうまく競馬会がきた。梅雨が来て女の人も田の仕事が終わって、男性も女性も一休みをかねて競馬をし、「あやめ」の根合をすることができた。そう云うことで、現在のように短い「あやめ」を引いても、これは「あやめ」の根合の意味がなくなってしまったわけです。だから、暦と伝統行事の関係には留意が望ましいですね。

最後に私の好きな歌を一つ見て頂きます。

神山のしたもささらに流れ出づる 御手洗川の水のすずしさ 津守国基  
神山の下からさらさらと流れ出ている、この社頭を流れるこの御手洗川の水のなんと清らかなことでしょう。津守国基、これは摂津の住吉神社の神主さんです。賀茂社にお詣りして、こんな風に詠みました。そうしたところが、賀茂社の神主であった成助が「返し」にこんな歌を詠みました。

わが里にかたりもわたれ今日むすぶ 御手洗川の水のすずしさ 賀茂成助  
「わが里」と云うのは貴方の里と云うことで、摂津の住吉の里にお帰りになったら、里人に語り継いでくださいませ。今日みそぎで手にお掬いになった、この社頭を流れる川の水の清らかさを、とうまく返したものです。この賀茂成助と云う人は1034年の生まれで、1084年に亡くなっていますが、この方が良い歌を詠まれたところから、賀茂一族の方々が、県主一族の方々が皆が歌を詠まれるようになった。賀茂の歌人達の先達なのです。先程云いました藤木さんのご先祖でいらっしゃる藤木家の最初を興された藤木重保さんの曾おじいさんにあたります。賀茂成助がそうです。この方の歌でもう一つ好きなのを最後に挙げておきました。

秋風の吹く夕ぐれはきぶね山 こゑをほにあげて鹿ぞ鳴くなる

「こゑをほにあげて」鹿は秋が深まると妻恋をする。奥さんを捜して鳴くわけです。舟の帆を揚げるように、喉を反らして声を上げる。その妻捜しの声が秋が深まるにつれて、遠くまで大きく聞こえるようになる。きっとこの上賀茂の社頭にも貴船山の方から妻恋の声をあげる鹿の声が聞こえてきたのでしょう。夕暮れになるとそうだったのでしょう。ちょうど今頃の季節に合っている歌がこれではないかと思えます。「秋風のふく夕ぐれはきぶね

山 こ糸をほにあげて、舟の帆をはるように喉をそらして、声をしぼらせて、牡鹿が鳴いているなあ、そう云う歌です。

有難うございました。